天山

阪田寛夫

河出書房新社

天山

阪田寛夫

河出書房新社

阪田寛夫（さかたひろお）
一九二五（大正十四）年、大阪に生まれる。東京大学卒業。放送局勤務をへて作家生活に入る。一九七五年、「土の器」で第七十二回芥川賞を受賞。「わが小林一三」で毎日出版文化賞を、「まどさん」「童謡でてこい」で巌谷小波文芸賞を受ける。また、芸術祭文部大臣賞受賞「天山北路」、久保田万太郎賞受賞「花子の旅行」などの放送劇のほか、児童文学、童謡の作詞も数多く手がけ、「トラじいちゃんの冒険」で野間児童文芸賞、曲集「うたえバンバン」で日本童謡賞、詩集「サッちゃん」で日本童謡賞と赤い鳥文学特別賞を受賞。一九八七年、「海道東征」で川端康成文学賞を受賞。

天山（てんざん）

©一九八八
昭和六十三年四月二十日　初版印刷
昭和六十三年四月三十日　初版発行

著者　阪田寛夫
発行者　清水勝
発行所　河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　〇三―四〇四―一二〇一営業
〇三―四〇四―八六一一編集
振替　東京〇―一〇八〇二
印刷　暁印刷
製本　和田製本
定価は帯・カバーに表示しています
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4-309-00483-0

目次

天山 5
吉野通 39
戸へ来らい 73
富士山 107
打出 145
オハイオ 181
あとがき 218

裝丁　田淵裕一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

天山

短篇集

天

山

一九六九年九月半ば過ぎに中央アジアに着くまでは、シルクロードとはのどかに爽やかな一本道だと思っていた。そこは月が昇るとことさら涼しげで、白い隊商をのせたラクダが鈴を鳴らして歩み去るのであった。

「月の沙漠」という童謡があるが、私のイメージは、ラクダの背中に金銀の鞍、王子と姫が揺られ揺られて、という歌詞とさして変りはなかったのである。

アメリカ映画からもらったイメージもある。ボブ・ホープやグルーチョ・マルクスの出てくる喜劇のオアシスは、たいてい椰子の木が二三本はえて、その下に泉がわいていた。ついでに裸の美女が横たわっていたりもした。

だが、私が廻ったソ連領中央アジアのオアシスは、緑の耕地の中の都市であった。泉ど

ころか上下水道が備わり、市電やトロリーバスが縦横に走っていた。しかもその都市を飛行機でとび立つと、たちまち前方に白く、あるいは赤く輝く海のようなものがあらわれ、すばやく前後左右にひろがり、いまいた場所が実は沙漠の中の「島」にすぎないことがわかってしまうのであった。

白や赤の砂の海には、ところどころ朱色の地層の帯が燃えかがやいていることもあったが、ざっといえば、どこまで飛んでも様子が変らない。砂に三角の波模様がひとたびたちだすと、それきり飛行機の窓に同じモザイクが一時間も映り続くのである。

たとえアラビアンナイトの魔法の絨緞でも、よほど速力が出なければ搭乗者が空中でひからびてしまうことが、機上の私に実感としてわかった。私は気密構造のジェットプロップ機で廻り、夜は西欧風のホテルのベッドに寝ているのにもかかわらず、こちらへ来て二週間めに、もう体がだめになっていた。

それを、日程のきびしさと、ウォッカのせいにすることもできる。天山北路の歴史——つまり玄奘三蔵をはじめ往古この路を通過した人々の軌跡の取材、というこちら側のスケジュールの上に、発電所や工業博覧会見学といったソ連側のスケジュールを消化せねばな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

らなかったし、由緒あるオアシス都市を訪れるたびに、彫りの深い顔、アリババの盗賊のようなひげの濃い、心あつい男たちがウォッカの乾杯で迎え、ブランデーの乾杯で送ってくれる、その杯をぜんぶ飲み乾してきたからである。

あいにくと、私の連れはアルコールをうけつけない体質であったから、私は気弱くも、親善と健康のための乾杯を日本を代表して残らず胃の中に流し入れた。本当は植木鉢にでもあけたい所だが、グラスに口をつけぬとアリババの盗賊が首を横に振って、

「サカタ！　グット！」

と、にらむのである。

「グット」「チビリチビリ」は、私が彼らに躍起になって教えた二つの日本語である。日本の国情ではチビリチビリとたしなむのがよいとされている。君たちはグット、私はチビリチビリでと、行く先々で説いたのだが、そんなことで許してくれるのは最初のうちだけである。気分が昂揚してくれば、彼らはグッと盃を乾すよりほかにこちらのまごころを認めてくれようとはしなかった。

日ソ両国のために乾杯し、三蔵法師やレーニンの偉業をたたえて乾杯し、それから取材

の成功のための乾杯となる。もうこれでおしまいと安心してグッと乾すと、
「このウォッカを作った人々のために！」
と忽ちになみなみと注がれる。やっと飲み乾すと、
「このグラスを製作した労動者の汗のために！」
とくる。彼らの心はあつく、胃はたくましく、乾杯のたねは無限に尽きず、ついに私は連日重い胃袋をかかえ、頭の上に泥板の屋根とドームの照りかえしをぎらぎら浴びて、砂っぽい街を滄浪と歩みつづける羽目となった。

私たちの取材は、モスクワより空路六時間、オアシスの中心都市タシュケントに入ることから始まった。この地は玄奘三蔵の旅行記『大唐西域記』にいわゆる「赭時国（シャーシュ）」である。三蔵はここに暫時をすごして葉口河すなわちシルダリヤを渡り、西南五百余里のサマルカンドに入った。私たちも同じコースを空路二時間で飛んだが、藤棚の下に野天改札口のあるサマルカンド空港に降り立ったとたん、歯ぐきがはや、うずきだした。体験によれば、これは体調が崩れる前兆であった。

続いて古都ブハラに着いた——ブハラは七世紀当時も名邑と言われた町である。ただし

玄奘たちはここへは寄らずサマルカンドより一路南下して、いまのアフガニスタン領へ向かった——その朝私は由緒あるメドレッセ（回教の寄宿学校）の高いドームを見上げて気持がわるくなり、一行が屋上にあがったすきに、二階の寄宿房の穴ぐらの中へひそかに反吐をはいた。

むかし回教の教職を志した青年が一房ずつ与えられて、そこでコーランや暦を勉強したという無数の穴ぐらはかわいた白砂がうずたかく積もり、九月の太陽が一握りの棒のふとさで天窓からまっすぐに落ちこんでいた。その穴ぐらの一つに入りこんで腰をかがめ、七百年むかしの日干し煉瓦の壁に向かい、声を殺して反吐をはいていると、何ともいえぬ虚無的な心持におちいった。

小説『西遊記』に出てくる三蔵法師はどうしてあんなに駄目な男なのだろう？　本物の玄奘は初志を貫くために国法を犯して西域へ奔るほどの豪の者であった。しかるに小説の中の法師は、ただ無力で、孫悟空や河童や豚の足手まといとなり、求めてなまぐさい羊肉の国に来ながら菜食を欲し、青ぶくれの体軀が怪物の好餌となってつけ狙われながらも見栄をはって、妖怪に対してもヒューマニズムを固執し、

「みだりな殺生は仏弟子にあるまじき行い」
などと簡単に悟空を破門したくせに、いざ危害が身に及ぶと今棄てたばかりの弟子にすがって泣きわめくのである。
その三蔵に自分が似ていることに、私は声をひそめてもどしながら気がついた。私は無力なくせにいい格好をしすぎる悪癖がある。日本代表気どりで無理にウォッカを飲んだのもその一つ。この朝も二日酔の胸のわるさをおさえて、ムイコフ氏に言われるままに、羊の脳味噌を饐えた乳で煮つめた料理を嚥み下していた。ずいぶん気をつけて吐いたのに吐瀉物のとばっちりが七百年のかわいた砂にはね散りズックの運動靴に付着して、みるみる白く乾いた。
通訳のムイコフ氏はモスクワ大学出身を誇りとする眼鏡に白面、どちらかといえば童顔の青年だが、仔細にみれば腹のまわりが一メートル五〇を越して、中だるみのヒグマのような体格である。それだけに大食漢で、おまけにインテリらしい親切気と、もっとインテリくさいサディズムから、食物に慣れない私たちを、
「中央アジアに来て、羊が食べられなければダメ！」

と叱りつけて、しばしば得体の知れぬ食品を食べることを強要した。

たとえば彼はバザールの裏通りに私らを案内し、地べたの洗面器いっぱいに盛りあげた羊の腸を皿に山盛り買って食わせた。蛇のようにとぐろをまいた血いろの腸をウズベク人のおかみさんが手でつかんで包丁でズブズブ切ると、中から糞便のかわりにぬるぬるした米が出てきた。私は日本を代表してけんめいに笑顔を持続しつつ全部のみこみ、エナメルの皿に残った赤い汁までみなすすった。

メインディッシュが済むと、次はピクルスの汁である。バザールのピクルスの売り台では、腕ほどの大きさのキュウリの漬物に、農婦たちが瀬戸引きのコップで酢をかけながら売っている。ムイコフ氏はその酢だけをコップについで、たっぷり味見をしてはチョチョチョと舌先を鳴らし、私にも二日酔の妙薬を飲めとすすめるのである。キュウリの入った金だらいには、緑色の薬草が浮んでいた。

偶然私がキムチを発見したのは、このピクルス売り場の隣である。同じような売り台に、朝鮮の白菜漬がビニールの袋に入れて売られていた。唐辛子の赤い色で気がついた。

台のうしろに立っている渋紙色の老婆の顔に目を移して、私は一瞬、ここがどこの国の

公設市場だったかと思い惑ったのである。

「この人は、朝鮮の人ではないか？」

心をおさえて、ムイコフ氏に小声でささやいてみた。ひょっとして老婆が日本語を知っていると失礼だと思ったからだ。彼女はウズベク人の婦人が好む雲型模様の民族服を着ていたが、足もとをみると、先のとがったゴム靴である。まちがいなかった。

「一九三七年に、間島からこちらへ来た」

皺の深く灼きついた老婆のウズベク語をウズベク人の通訳がロシヤ語に直し、それをムイコフ氏が日本語に訳した。私の質問はその逆の手間をかけて彼女に達するのである。隣国の人に対して、これは皮肉なことであった。この辺ではキムチを「チムチム」と呼ぶ由である。

朝鮮人ならこのウズベク共和国に二十万人はいる、とウズベクの通訳が驚く私に追い討ちをかけた。気を落ちつけて見廻すと、その売り台に立っている十人ほどのおばさんは、すべて朝鮮婦人の顔だった。少しだまされたような気もした。遙かなる月の沙漠のシルクロードに、隣国のおばさんがずらりと居並んでいては、鼻先に水をさされたようなもので

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com